

小谷章小説集

労働者文学叢書 3

部分たち

労働者文学叢書 3

部分たち

著者 ● 小谷 章

装幀者 ● 加藤幾恵

発行者 ● 笛木利忠

発行所 ● 土曜美術社

東京都中央区新川二―二八―一府研
ビル

千一〇四電話〇三(三四一)二八五九
振替 東京九九二九二一

印刷 ● 日本美術印刷株式会社

発行 ● 一九七六年八月二〇日

定価 ● 一二〇〇円

1393-0038-5330

部分たち



目次

墜落	5
亡霊者たち	29
部分たち	79
壁の中	121
魚の眼	171
犬の生活	217
解説 原田 寛	260
あとがき	268

墜落

その時、彼は診療所の待合室の固いソファに坐っていて、直ぐ前の白いカーテンが風もないのに時時彼の方に向って吸い込まれるようにゆれてきて、そして又戻っていく様を、何時もがそうであるように心が留守になったような面持で追っていたのだが、その彼の耳に、白いカーテンが心持ちこちらに向ってゆれる間だけ、カーテンの向う側の声とざわめきが、まるでカーテンのゆれと呼吸を一緒にでもしているように聞えてくるのだった。しかも、それは始めは遠くから、そして次第に近くなってくる海のざわめきや響きのように、その声の高さ低さ、アクセントまでが次第にはっきりと彼の耳にも聞きとれるようになったのだ。そうなるのと彼は坐ってはいられなくなり、カーテンの端に立って、そのわずかの細長い空間、診察室は明るく、待合室は暗いために、光を覗いたように眩いものだったが、その空間から見えた後姿は確かに脇田のものであった。鉢のように上へいく程広がった頭部、後頭部がいきなり幅広い部厚な肩にめりこんでいるような恰好の悪さなど、総てが脇田のものであることは確実なのに、彼にはどうしても、カーテン一枚隔てた向うに脇田がいることに唐突さを感じ不自然さを感じてならないのだ。ここは自分だけの世界なのだ、こんな場所に脇田が入りこんでくるなんて、毎日の様に机を並べながら彼は何時も感じている疎遠さ、距離の遠さがそのまま思い浮かんできて、ますますぎくしゃくした落着かない気分になるのだった。

「ええ、ええ」と大きな頭を振りながら脇田が立上った。立ったまま、真向いの女医の方を見ずに女医の背の窓ガラスに強く屈折する陽の光を手でかざしながら「暑いなあ」と無造作に言った。それは脇田が局でよく「君等は弱いなあ」とか「課長は駄目だなあ」と言う調子に似ていて彼は思わずカーテンのそばから身を離した。自分が後ろにいることを知って声をかけられたような気がしたのだった。

「明後日ですね」と今度は調子を変えた声で、それを機に立去る気配に、彼はせかされてそうするかのように自分の坐っている位置を急いで入口の方の隅に変えたのだ。しかし、そんな理由も必要も少しもなかった。ここの精神科は出入口が別々になっていたのだ。脇田が去って、閉めたドアが軋りながら長く続き、そして、それが止んでも女医は彼を呼ばなかった。何時もそういうやり方なのだ。まったくの静けさの中で、診察室と待合室に少くも二人の人間がいるのにまるで誰もいないような気配の中で彼は鉛でも頭の中につめられていくような重苦しさを感じはじめた時だった。二度、三度と呼ばれて彼はやっと心を取戻したように自分に返事をしながら診察室へ入っていったのだ。しかし、診察室へ入っても決して女医は彼の方を振向かない。自分から、待合室と同じように固い黒い皮のベッドに横になって待っているだけだった。

「どう」故意にというより習慣で抑揚を殺した声で女医がやつと声をかけてきた。

「ええ、まあ」ただ、そう答えながら彼は脇田がこのベッドに横になった様を想像するのだが、それは彼の想像を越えてしまうのだ。脇田がここに横になって、この女医に眠れない、苦しい、もやもやする、助けて下さいと呻吟する様をどうしても描くことは出来ないのだ。

「どうした。眼をつぶりなさい」

「はい」彼は素直な気持になって眼をつぶる。すると彼の眼の前の総ての色や光や音、彩られ、着色された彼をめぐり、とりかこむ一切の現実が消えて、暗く、不透明な闇のような空間がつぶった眼の前に拡がり、深い疲労のリズムが脈打ってくる。それは彼の前に押し広がる暗い空間とまったく呼吸が同じなのだ。

「何が浮かんでくる？ さあ、此の前のつづきを話してごらん」

「ええ」

彼には此の前のベッドの上で話したことなど何も浮かんで来やしない。今はただ、この深い吐息のような呼吸をつづけたいだけだったのだ。「話しますが、でも、もう少しこのままにさせて下さい」

「で、昨夜はどう」女医は机の方に顔を向けて続けた。「尤もその顔色じゃ眠ったようには見えないけどね」

「ええ」と彼の返事は矢張り吐息のようだ。もう少し寝かせて下さい、と言葉に直せばそんな吐息の返事だった。

「眠っちゃ駄目よ。ここは休むところじゃない、直すところだからね」

「ええ、わかります」彼は眼をあける。光が音が一齐に機関銃の乱射のように彼を突き射す。昨夜のことを話そうと彼は昨夜のことを思い浮かべようとする。しかし切れ切れなのだ。ただ一つだけ、それはもう今日の時間に入る程の深夜だったが、その時間まで眠れずにいた彼が不意にドキッとしたように妻と子供の顔を眺めたのだ。そして、その時に俺は必ずこの二人より先に死ぬに違いないという絶対的な想念が彼の中を走っていったのだ。それは彼に恐怖を与えたが、それでも彼は決してこれは想像でなく、自分がこの二人より確実に老い、萎え、弱まっていく一つの要素を持っていて、その同じ部分でもこの二人のものはもっと強く健康なのだという確信を持ったのだ。それを女医に話そうとしたのだ。しかし以前にもこのようなことを話そうとして、実際に話し出すと言葉は別の意味を持ち、中味もどこかズレてしまったことがあった。いや、その時だけでなく、これまで女医に話し

たことは総てウソばかりのような気がするのだ。母親がいらない。飛箱が飛べなかった。顔がおかしい。兄貴が嫌いだった。それら総ては事実だ。しかし堆積にしか過ぎないのだ。今の今、彼の頭、それはふくれ上って爆発しそうになるのだが、それを言葉に構築しようとするとは彼は先ず言葉を失ってしまふのだった。ただ漠とした拡がりとしか言いようのない果てのないような自分の内部を一体何と説明したらいいのだろう。「貴方はね、ここじゃ軽い方なんだ。もっとひどいのがいるからね」そんな筈があるものか、彼は女医が何時かそう言ったことを思い浮かべ、眼の前の女医の少し飽いたような顔を心の一部に留めながら又眼をつぶると、網膜の暗い拡がりの中に小さな黒点、それは蚊が飛んでいるような感じなのだが、それを追いかけて捕えようとし、若しその黒点を捕えることが出来たら、そこそ彼の言葉でとらえられない言いたいことの本当の核のような気がして彼は追いつめていくのだった。しかし、黒点は暗がりの中で飛び、跳ね、逃げて彼を翻弄するばかりなのだ。「えっ」手に汗をにじませ、まるでそのあがきや徒労が真の目的でもあるかのように彼は暗がりの中の探索を執拗に続けるのだった。

その日も結局彼は前と同じ散薬を処方してもらって診療所を出た。各階止まりのエレベーターに乗って下に降りる。このビルの中には映画館もあればビヤホールもあり、探偵事務所もあれば精神科の診療所もあるのだ。それらがごっちゃになり、入りまじり、そしてその中からはじき出されるようにしてエレベーターから下りると、夏の残りのきびしい陽が彼を射す。彼だけでなく、乳白色の空から射すその強い陽射しは、埃っぽい街路を、そこを歩く人の背や頭を、屈折の多い不揃いな建物を容赦

なく自分の手中に入れているのだ。その中に一步踏みこむと彼の足元はぎくしゃくと頼りな気になる。足が地につかない感じなのだ。一度、彼は街中で昏倒しそうになったことがあった。人通りの多い道で、彼の前を三つ位の男の子が二人手をつないで歩いていったのだが、そして彼はその後姿をぼんやり見ていたのだが、不意に眼の前に黒い帳が降りてきて光が閉され、地に手をついてしゃがみこんでしまった。そして恐る恐る眼を開き光の方向を仰ぐとすると、頭の中の何か脆弱な部分がそれに耐えられず、彼は闇の中を泳ぐような恰好でやっと傍の電柱に身をもたせかけることが出来たのだった。不審と無関心な眼差が彼に向けられ、いや向けられながらも動き、通り過ぎていくのだが、その通過していく他人の眼を意識しながら、彼は妙に冴えた充実感を味わっていたのだ。俺は不眠症で、混乱している。片方でそう感じながら、片方では通り過ぎていく他人に持てない感情が自分の中でふくれ上ってきて傲慢な快感に満たされるのであった……。信号が青に変わり彼は日劇の方へ向って歩き出した。彼の前も後も人だ。その人の中を際立って背の高い金髪の女が歩いている。顔を見ることが出来なかったが彼が何より惹かれたのはその襟足の美しさだった。肌の色そのものというか、冴えた、のびのある襟足に錯綜した金色の髪の乱れが美しいのだ。そこに吸い寄せられていくと果てがないようなのだ。そこに惹かれていくとたえる気持を失いそうだった。既に足の甲のあたりが震えてきている。歩道を渡り切ったところで彼は足を止めた。何時か街で昏倒しそうになった時と同じような心の騒がしさを感じたのだ。彼は光に襲われる前に自分から眼を閉じて暫くの間立ちすくんでいるのだった。

朝、彼は不十分な気分で眼を覚した。まだどこかに葉が残っているような気分だった。妻も子供も

既に起きていた。彼は枕元の新聞をとり上げる。そしてむさぼるように、それは腹を空かした子供の勢いと同じように新聞から何かを掴みとろうとでもするような勢いで読みはじめる。彼は何か自分の心を騒がせ混乱させる事件や事実を探し求めるのだ。そしてその事件や事実に対応する自分の心の振幅が大きければ大きい程、動揺や不安がつのればつの程、彼は自分を確めることが出来るのだった。それは彼が結婚してから特に、家庭生活とはまるで根を別にした樹木のようにどんどん成長してきたのだった。ここにある、彼は三面記事に眼を奪われた。恋人が二十年経って原爆病で死んだため後を追って自殺した若い女の写真がのっているのだ。眼をこらしてその写真を見つめる。そうしていると新聞の写真はネガで彼の心に焼付をすることが出来るかのようにだった。暫くそうしてふと新聞を上げて見ると彼の寢床の足元のあたりにキッチンとひざを揃えて坐った彼の子供がジッとこちらの仕草や挙動を見守っているではないか。「どうした」彼は子供に声をかけたが、まるで痛ましいものでも見るような眼差で見据えるだけで返事をしようとしなかった。「孝」台所からの妻の声だ。「邪魔をしてはいけませんよ。お父さんをソッとして上げるんですよ」立上った子供は彼に一べつを呉れただけで台所へ歩いていく。まだ足元さえ定かでないのだ。たった二歳じゃないか。二歳でしかないのにどうしてあんな眼で俺を見るのだ。「お父さんは疲れているのよ。うるさくしては駄目なのよ」妻が子供の頭を撫でている。今まで一度だって彼の妻が子供に対して彼を非難するような、咎めるような口振りで話したことはないのである。何時だって庇うように優しい調子で語りかけていたのに子供は彼に懐こうとしないのだ。彼は元交換手だった妻と恋愛結婚をしたのだが、思えばその当時から優等生の妻になる様々の素質を持っていたに違いなかった。「下着、取替えてね」妻の声に、彼はキッチンと

揃えられた枕元の下着を何やら醒めた心持で取上げるのだった。

改札を出ると朝のまだ湿った重い張りのある空気と共に、それを真直に貫いて強い陽が彼を射る。

駅前は大い石畳の坂道で、それを下って明るい瀟洒な銀行とガラス張りの交番が向い合っている角を左に折れて真直ぐ行くと彼の勤める局があった。タクシーが駅前に向って坂を上ってくるのに平行に逆らって下りてゆくと十米程前を鉢の恰好の頭を重そうに振りながら脇田が歩いてた。その足どり、肩の張りが、彼から見れば力を失っているように思えて、彼の足どりは極く自然に早くなった。話してみようか、診療所でのことを自分の方から話しかけてみようかという自然の感情が先立って足どりが早くなったのだ。しかし、その彼より早く、彼を抜いて二人の若い男がピタリと脇田の両側によりそった。二人とも課は違いが同じ局の人間だった。「オス」と二人に頷いて見せた横顔と声は、診療所で陽の光に手をかざして「暑いなあ」と言った時の自然の明るさで、のびのびとしているのだ。急に肩にも足にも力が加わったように、強い足どりで二人を引張るようにしながら角を左に曲っていく。たった今、自分の中に広がった脇田に対してのナイーヴな衝動を自分でうちこわしながら彼は同じところを曲らずに更に一つ先の角まで速度を弱めて歩いて行った。

昼休みだった。午前中ずっと席にいなかった脇田が休憩室に戻ってきた。入口に近いソファに横になって眼をつぶり、蜥蜴の尾のように切っても切っても断ちきることの出来ぬ、不透明でブヨブヨとふくれ上ってくる暗い想像の世界の中に身を沈ませている彼の眼の前、彼の横になっているソファの背板に手をかけ「誰か手伝ってくれ」と憚らぬ太い声で言った。薄眼を開き、自分と脇田の境の定ま

らぬ思いのまま、その太い声を聞いて彼は背を叩かれたようにソファの上に起上った。脇田の腹のあたりが彼の髪に触れた感じが残ったが、相手は彼のことは気にもかけぬようにズカズカと畳の方へ歩いていった。そこには課長と、脇田と同年輩の秋田、秋田と親しい二人の同僚がいるだけだった。

「一寸、来てくれ。屋上から垂幕を張るんだ」

「何で」動く気のない秋田が寝ころんだまま面倒臭そうに言った。

「何でだって。頼んでいるのだぞ」

「だから何でだって聞いているのさ」それは脇田に対する敵意とか反撥というより悪意のこもった揶揄と言った調子だった。脇田のこれからしようとすることを知った上で、それを見物してやるのだと言う心構えが示されていた。一体に秋田は、何年か前の大雪の日課長と二人だけで歩いて出勤したり、又管内の野球大会の時に外野の塀に頭を打ってまでボールをキャッチしたりし、そういうことには照れない強さを持ちながら脇田に対すると妙に執拗なところがあったのだ。つい先日にも脇田が休憩室の壁にベトナム戦争の記録写真を貼りつけたことがあった。矢張り昼休みで休憩室にいた人間は彼もそうだったが、脇田の後ろから貼られている写真を眺めていた。主に捕虜と戦屍体の写真だったが、その中の一枚に顔を近づけながら秋田が「これ、男か、女か」と、ただそれだけが疑問だと言った調子で言ったのだ。脇田は返事をしなかった。「わかるか、これ」秋田は面白がってでもいるように後ろを振り返った。その顔には明らかに挑発があった。確かに被写体はばやけている。不鮮明で黒っぽく、その映像は性別さえ定かではなかったのだ。しかし、後ろの方から見ていた彼には、その映像が不鮮明であればある程、彼の心はそれに強く焼付けられ、悲惨と死のイメージが大きな波のように果

てしない反覆を繰り返すのだった。更にその彼の心を騒がせたのは死と悲慘のうねりの中で身も沈みそうな彼とはまるで違った場所から出てきた秋田の言葉だった。

「興味があるのか」写真を貼り終えてから脇田が言った。「男か女か興味があるのか」

「あるね」平然として秋田が受けた。「あるが、それはいい。第一、男か女かお前にもわからんのだ。それよりな、こんなものは印刷さえすれば何千枚、何万枚でも出来るんだ。わかるか」

「それで」残った画鋏をしまいながら脇田が静かに言った。「それがどうだというのだ」

「俺が弁当を包んできたのはそういう写真だ。家の風呂の焚付もそれが載っている新聞だよ。つまりは屑というわけさ。それにな、お前は戦争を知らんのか。東京の空襲を知らんのか。こんな写真は何も事新しいことじゃねえんだよ」とその時、強いブザーの鳴動音が休憩室を震わせた。窓ガラスが震動する程の強さである。地下ケーブルの収容されている洞道にガスが漏洩すると鳴動する仕組であり、それは直接にも間接にも地下ケーブルの支障を知らせたものであった。最初に休憩室を出ていったのが秋田だった。少しの躊躇もなく真直ぐに他人に少しも気遣いせず当然のように試験室へ入っていったのだ。昼休み試験室には一人しか居らず、それを手伝うため出て行ったのだ。「へえ」脇田の写真貼りを手伝っていた若い男が露骨に敵意を見せて言った。「点数かせぎじゃないか、昼休みなのに。ねえ、脇田さん」何時も若者にきびしい秋田はよく陰口を若者たちからささやかれてもいたのだ。

「まあ、いいさ」重そうに頭を振りながら、脇田は若者の肩を叩いて言った。「しかし、いい時警報が鳴ったじゃないか。えっ。まさか君、あの警報、何だか知らないわけじゃないだろうな。えっ、さあ、行こう」とまだまだ残っている写真の束を抱えて休憩室を出て行った。出て行くと直ぐにそれま

で足踏みしていた、二、三の課員が試験室へ走っていく。取り残されたのは課長と彼だけだった。課長は何時も何も言わない。見ているだけなのだ。彼は動きがとれなかった。脇田と秋田のやりとりがそのまま彼の心の振幅となって、たとえ二人は忘れても彼の中にはとり残されるのだった……その時の取り残された自分の姿が今そのままに蘇ってきて彼はソファから立上ると畳の方へ歩いて行った。思い返してみてもどうして歩いていったのかわからないのだ。ただ、自分が強情そうな顔で脇田の横に立った姿が妙に客観化された形で、直ぐその後で浮かんできた程だ。

「僕でよかったら、その垂幕ですか。手伝いますよ」

脇田も秋田も、ほかの同僚たちも驚いたというより何か自然でないような眼差で彼を見た。

「いや、いいんだ。いいんだよ」と脇田が妙に遠慮っぽい低い声で言った。「君でなくたってここには人がいるんだから」

「いいじゃないか。手伝って貰えよ」秋田の意地の悪い声だ。眼も彼を見据えて離さない。彼は自分が曝し物になっているという自覚と、自分が立っていること、言っていることが相手に少しも伝わっていないもどかしさ（彼は必要事以外、今まで殆ど誰とも話らしい話もしていないのだ）のゴッちゃになった居心地の悪い気分のまま突立っていた。

「重いんだよ、君」脇田がもう一度振り返って彼に言った。本当に気にかかっているような優しい言い方だった。「それを屋上まで持って上るんだよ」

彼は脇田を見ているだけで、それも現実の眼の前の脇田でなく、あの白いカーテンの透き間から光を覗くようにして見た脇田の姿を心に描いて立っていたのだ。「ふん」脇田が勝手に頷いて立上った。